

# 近世末期・近代における日蓮像の構築の一側面

—辻説法に着目して—

ブレニナ・ユリア

## はじめに

日蓮は声大きい。しかも、よく響く。<sup>かまびす</sup>喧しい市中であれ、物ともしない。行き交う列から頭ひとつ抜ける大きな身体も、人目を惹くのに一役買う。

「法華経をこそ奉じなければなりません」

急ぎ足も、ほとんどが振り返る<sup>1</sup>。

これは2021年2月16日、日蓮生誕800年にちなんで、新潮社から刊行された佐藤賢一の『日蓮』という小説<sup>2</sup>の一場面、すなわち鎌倉での辻説法の描写である。

辻説法とは、人通りの多い町角（辻）に立って道行く人びとに法を説くもので、仏教の布教方法のひとつである。現代でいえば街頭布教に当たる。とりわけ鎌倉の大町・小町の辻で説法をしたという日蓮の故事が有名である。戦闘的な折伏を行った日蓮のイメージのひとつとして広く定着している。

だが、実は、その事実を確認できる史料はない。日蓮自筆の文書（遺文）には辻説法についての記述がみえない。16世紀に作られた絵詞伝『日蓮聖人註画讃』<sup>3</sup>には屋内説法の図はみえるが、屋外説法の様子を描いたものはない。そもそも「辻説法」は中世にみられない語であり、その定着は明治以降のことである。

三浦勝男は、日蓮在世の「鎌倉の様子や各種の禁令などから考えると、往来の障害になるような、人びとを集めての辻説法はあり得ない<sup>4</sup>」と、すでに1981年にその史実を否定している。三浦は鎌倉国宝館の学芸員（のちに館長）をつとめた人物である。また、日蓮の実像に迫る研究で知られる中尾堯や佐藤弘夫も、辻説法を裏づける史料は皆無であり、「まことに静かな伝道活動であった<sup>5</sup>」、「不特定多数の人々にやみくもに法を説いたというよりは、知己のルートをくだって一対一の対話を重ねながら着実に理解者を増やしていった<sup>6</sup>」と、初期の布教活動を捉える。

さらに近年、鎌倉での布教の初期に成立した遺文を分析する石附敏幸は、日蓮が鎌倉上層の僧俗が列席する法華講会で講師を勤め、法華至上主義・念仏批判などの自己の思想を講じたことに注目する<sup>7</sup>。石附は、幕府関係者に押しかけて直訴する姿や市中で辻説法をする姿よりも、「法会というハレの舞台で自己の思想を発揚し、支持者の輪を拡げ、その人脈を通じて必要文献の閲覧を可能とさせ、さらに思想を練り上げていく、そのような鎌倉武家社会との活発な交流を通じて思想を鍛え上げていく躍動的な姿こそ、史実に近い日蓮像なのであろう<sup>8</sup>と述べる。

このように辻説法の史実は学術研究において疑問視されているが、その由来を検討した唯一の日蓮研究者は高木豊<sup>9</sup> (1928～1999) だろう。高木は、『国史大辞典』第9巻(吉川弘文館、1988年)、『世界大百科事典』第8巻(平凡社、1988年)、『日本史大事典』第4巻(平凡社、1993年)の「辻説法」の項目を執筆している<sup>10</sup>。高木によれば、辻説法のごとは近世末期に語られ始め、当時一般信徒の人気を博した「繰り弁」のなかでみえてくると指摘する<sup>11</sup>。繰り弁とは日蓮などの伝記を独特な口調で語る説法のごとである<sup>12</sup>。しかし、事典の項目ということもあり、高木の簡略な説明では、彼が参照した繰り弁の史料が明記されておらず、その妥当性の検証は困難である<sup>13</sup>。

また、高木は、辻説法が日蓮独特の布教方法として強調され始めるのは明治に入ってからだと述べ、とりわけ次の三つの事柄に注目する<sup>14</sup>。1901年に日蓮主義の提唱者として知られる田中智学が鎌倉小町に建てた顕彰碑。1904年に歌舞伎の演目として初演された森鷗外の戯曲。そして、1907年に野田九浦が第1回文部省美術展覧会(いわゆる文展)に出品し、日本画部門で二等賞を受賞した絵画である。

後述するように、確かに顕彰碑や歌舞伎、絵画など、様々なメディアが近代における辻説法のイメージの普及と定着に大きく寄与したと思われる。だが、以上の高木の説明では、重要な要素が抜け落ちている。幕末維新期の居士、小川泰堂おがわたいどう(1814～1878、以下、泰堂)が著した伝記『日蓮大士真実伝』(全5巻、1867年、以下、『真実伝』)である。

なお、近年、教祖像や宗祖像の形成過程を追う優れた研究は、釈迦<sup>15</sup>や親鸞<sup>16</sup>についてなされており、とりわけ親鸞像や親鸞をめぐる語りの研究が充実している。宗祖ではないが、一休像の研究も大きく進展している<sup>17</sup>。親鸞以外の宗祖は近代の道元像の研究が挙げられる<sup>18</sup>。本稿のテーマである日蓮像については、近世の日蓮伝記本や日蓮伝承などを検討する冠賢一<sup>19</sup>、望月真澄<sup>20</sup>、荻野裕子<sup>21</sup>による研究の蓄積があり、また、近代日蓮像を取り上げる石川康明(教張)<sup>22</sup>、大谷栄一<sup>23</sup>、星野健一<sup>24</sup>の先駆的な研究があるが、辻説法は注目されていない。なお、日蓮伝記の挿絵の傾向を分析する望月真澄は、「鎌倉辻説法」が『真実伝』であらたに登場した場面である、と非常に重要な点を指摘しつつも、「泰堂が日蓮の生涯の中で注目した場面といえよう」という言及にとどまっている<sup>25</sup>。

さて、歴史研究において辻説法の史実が疑問視されていることは前述した通りである。し

かし、そうであるとしても、そもそも辻説法のイメージと語りはどのように構築されてきたのか。辻説法を通して人々は何を語ろうとしてきたのか。なぜ辻説法は現在も語られ続けるのか。これらの点についても考えなければならぬだろう。こうした問題意識を持って本稿では、ひとまず日蓮像の一側面として辻説法に焦点を当て、そのイメージの構築過程の一端を考察する。とりわけ『真実伝』における辻説法の描写と、鎌倉小町での顕彰碑の建立に至るまでの経緯や除幕式（「復興式」）について詳述する。高木が注目する歌舞伎演目と絵画は最後に取り上げる。なお、紙幅の都合上、辻説法の語りについては詳しく論じることができないため、踏み込んだ考察は別稿に譲る。

## 1. 小川泰堂の『日蓮大士真実伝』—近世末期の伝承と伝記—

まず小川泰堂<sup>26</sup>の『真実伝』を取り上げなければならない。なぜなら、高木が注目した智学の顕彰碑も、鷗外の戯曲も、九浦の絵画も、いずれもこの伝記に依拠しているからである。さらにいえば、管見の限り、「辻説法」という言葉自体の初出は、『真実伝』である可能性が高い<sup>27</sup>。

### (1) 泰堂の略歴と『日蓮大士真実伝』における辻説法の描写

泰堂は相模国藤沢の医師、小川天祐（孝栄）の長男として生まれ、1831年に江戸へ出て、1836年に神田に医院を開いた人物である。小川家の宗旨は時宗だったが、泰堂は日蓮宗に改宗している。きっかけは1838年、患者の回診の帰り道に、浅草蔵前の古本屋でたまたま日蓮の『持妙法華問答鈔』を手にしたことである。その名文に驚いた泰堂は、以来、熱心な日蓮信奉者となり、生涯を遺文編纂に捧げていく。日本各地を巡り、日蓮遺文の所蔵寺院やそのゆかりの寺院を訪ね、書写本を校合した彼の功績は極めて大きい<sup>28</sup>。泰堂が編年体の形に再編成した日蓮の遺文集『高祖遺文録』（全30巻、1880年）は、近現代における日蓮遺文研究の基盤となる。

文献批判をふまえて遺文集を校訂する一方で、泰堂は『真実伝』では、日蓮などにまつわる奇瑞の伝承や夢想譚を多く挿入し、写実と虚構を織り交ぜている。つまり、タイトルに「真実伝」とあるが、その内容は必ずしも遺文を踏まえた日蓮在世の史実にもとづく描写ばかりではない。むしろ、事実と脚色が一体となっている。とりわけ近世の霊跡伝承を豊富に盛り込んだことが、本稿で注目する辻説法のイメージ形成に大きく関わると考える。

泰堂自身が描いた下図をもとに長谷川雪提（1813～1882）に描かせた95枚の挿絵もまた、重要である。日蓮の鎌倉小町での辻説法の様子をわかりやすく描いた挿絵（図1）と同様または類似のもの（図2）が明治以降、版を重ねていった『真実伝』に掲載され、多くの画家が参照している。

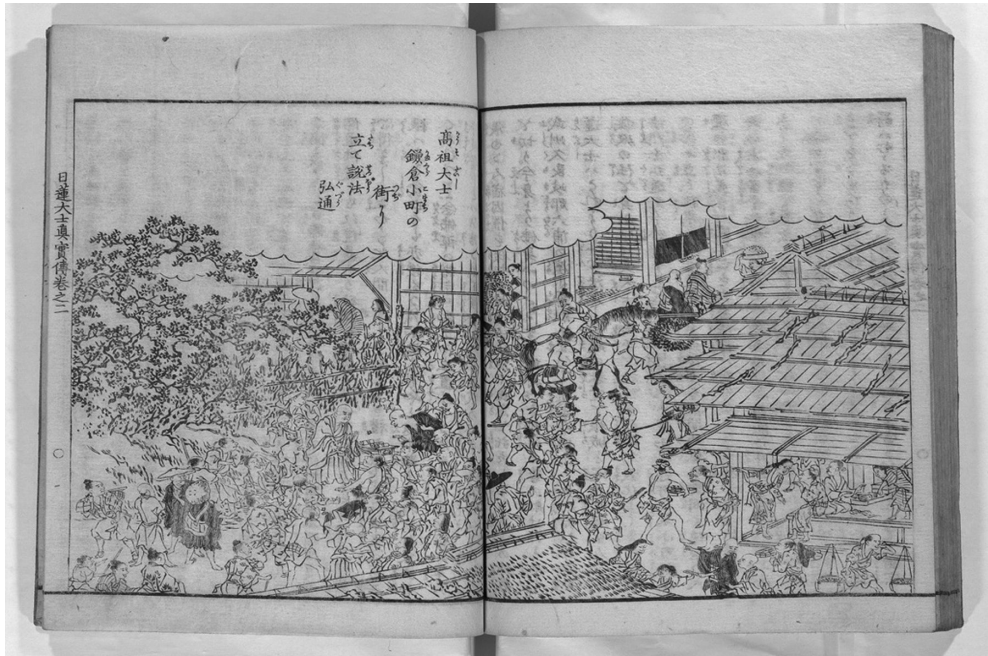


図1 辻説法の場面 挿絵1 (『日蓮大士真実伝』巻之二、1867年)

(<https://pulverer.si.edu>より転載)



図2 辻説法の場面 挿絵2 (『日蓮大士真実伝』村上書店、1913年、163頁)

(国立国会図書館デジタルコレクションより転載)

さらに、泰堂は伝記の中で遺文を日蓮に語らせたことが、注目すべき点である。生き生きとした劇的な文体は、歌舞伎の演目として上演される際に、そのまま、日蓮を演じる役者の台詞にちょうど良い。実際、1881年に大阪の中座で「日蓮大菩薩真実伝」、1886年に東京の中村座で「日蓮大士真実伝」が初演<sup>29</sup>されて以来、繰り返し上演されている。『真実伝』は明治から昭和にかけての日蓮を題材とした多くの演劇や小説に影響を与えており、鵬外も戯曲創作の際に参考にしている。

さて、『真実伝』における辻説法の描写をみてみよう。

大法将日蓮大士は、日に日に辻町の東小町往還の路に立ちて、往來の人の足を駐め、念仏は無間地獄の業因よ、禪宗は天魔の邪法、真言は国を亡す大悪法、律は国の賊なりと、声を限りに喚ばはり給ひ、末法当今の衆生の為には、南無妙法蓮華經の外助かるべき正法なしと、御經を卷返し繰返し、説き示し給へば、流るる水を塞ぐが如く、眠れる獅子を擲つが如く、立集ふ僧俗男女黒山の如く、眼を怒らし牙を咬み、悪口過言をするもあり、気の狂ひたる痴者なりと笑ふもあり、阿弥陀如来の現罰は斯かるものとて、石瓦礫古履雨霰御身に当るを事とせず、諸宗無得道墮地獄と高声に喚はり給へば（以後略）<sup>30</sup>。

ここで鎌倉小町の辻に立って説法する日蓮の様子が生き生きと描かれている。日蓮の代名詞とされる四箇格言<sup>31</sup>、すなわち「念仏無間・禪天魔・真言亡国・律国賊」を声高に叫び、行き交う人々の反感を買って笑われても、石を投げられても、まったく動じない堂々とした姿が浮かぶ。

## （2）辻説法と腰掛石の伝承

では、日蓮遺文や近世期に流通した伝記にみえないこの辻説法の場面を、泰堂は何に依拠して挿入したのだろうか。実は、手がかりは『真実伝』の中にある。辻説法の描写のすぐ後に、泰堂は「其辻説法の古跡、小町の路傍に日蓮聖人腰懸石とて、今にその傍は残りけり」と記している。つまり、鎌倉小町の辻説法の跡に日蓮が腰かけたと伝わる石が残っていると言うのである。

日本では腰掛石の伝承が豊富にあり、神や天狗、著名な武将や高僧が腰掛けて休憩したという伝説を持つ石が各地に点在する。例えば、源頼朝や源義家、空海、法然、親鸞、日蓮、西行、蓮如など、様々な人物の腰掛石が知られている<sup>32</sup>。日蓮の腰掛石は鎌倉の他に、新潟県佐渡市、栃木県日光市、山梨県笛吹市などにもある。

田中智学の門下、山川智応（1879～1956）は、近世末期に鎌倉小町に日蓮の腰掛石があったことを示す重要な史料として『新編相模国風土記稿』（全126巻、1841年）を挙げている<sup>33</sup>。

確かに第88巻の小町の條には「日蓮腰掛石。村東往還村道ノ左邊ニアリ」<sup>34</sup>という短い記述がみえる。『新編相模国風土記稿』は、天保年間に幕府が学者を動員し、聞き取りによる追加調査を行い、各地の庄屋などに書き出させた資料を検討・整理し、昌平鬻地誌調所が編纂した地誌書である<sup>35</sup>。少なくともこの調査の時期には小町に腰掛石があったと考えられる。しかし、山川のように、この記述と辻説法をただちに結びつけるのは性急である。具体的な伝承の内容は記されていないため、辻説法の跡と語られたかどうかを、この史料だけでは断定しにくい。

ただ、ひとつの可能性として山川による次の指摘を挙げておきたい。山川は、泰堂が「鎌倉忍艸」の著述の時、実地を踏査して、この「腰掛石」にぶつかり、里人の口碑を聴いて伝に書き入れられたものかと思はれる」と推測する<sup>36</sup>。確かに泰堂が若いころ、フィールドワークをしており、その際に腰掛石と辻説法にまつわる口碑に接した可能性がある。19世紀半ばに関東で私撰地誌の編纂が活況を呈し、ブームとなっていた<sup>37</sup>。泰堂は藤沢に対する郷土愛が強く、周辺の史跡を訪ね回り、スケッチしていた。泰堂自作の地誌、すなわち『我棲里』(全3巻、1829年、藤沢史跡名所案内)および『鎌倉忍艸』(1830年、晩年に再校、鎌倉金沢三浦の史跡名所案内)について子孫が証言<sup>38</sup>しており、『鎌倉忍艸』には小町の腰掛石への言及があるという<sup>39</sup>。ただし、『鎌倉忍艸』は草稿本で未刊のため、筆者は未見である。ここでは可能性のひとつとして挙げておき、今後の調査の課題としたい。

また、後述する顕彰碑のある場所の他に、鎌倉での日蓮の辻説法の由緒地として本興寺が目目される。その伝承は寺院の縁起に依るようだが、詳細は不明である<sup>40</sup>。ただ、鎌倉に日蓮の霊跡と称する寺院が多く、江戸時代には由緒をめぐる争いが頻発しており、時には由緒を跡づけるために寺院の縁起や日蓮の絵伝が作成されることもあった、という中尾堯の指摘<sup>41</sup>を踏まえれば、さらなる検討が必要だろう。

田中智学が設置した顕彰碑の中心にも腰掛石がある。もとは廃絶した妙勝寺門前にあったと伝わる(後述)。三浦勝男は「おそらく、江戸時代に鎌倉が史跡遊覧の地と化したとき、名所の一つとして生みだされたのであろう」<sup>42</sup>と推測する。もしそうであるならば、江戸時代に鎌倉の複数箇所の日蓮に関連する霊跡の伝承が成立する中、重要なモチーフのひとつとして辻説法が生み出されたと考えられる。しかし、現時点で筆者がこの点について明確な答えを導き出せる史料は発掘できていない。今後さらに史料調査を続ける必要がある。

### (3) 中村経年の『日蓮上人一代図絵』

ところで、石川康明は、『真実伝』は霊跡めぐりのガイドブックとしても読めると指摘し、「泰堂は霊跡の伝承を諸伝記から選び出しながら、自ら探訪をおこなった」と述べている<sup>43</sup>。つまり、辻説法については伝承だけでなく、他の伝記の記述と突き合わせることも、手がかりとなる。

例えば、泰堂は、同じく幕末の在家信徒、中村経年（1795～1862）の『日蓮上人一代図絵』（全6巻、1858年、以下『一代図絵』）という伝記本を校閲したことが知られる<sup>44</sup>。その内容を確認すると、「辻説法」という語は用いられておらず、説法の場面が屋内なのか、屋外なのかは判然としないが、次の描写が注目すべきである。

高祖はますます勇猛に、大音声を以て四方に告るに、念仏は無間地獄の業、禪は天魔波旬の徒、真言は国を亡し、また身を喪ふの邪法なり。律宗は国邑の賊、（以後略）<sup>45</sup>

諸宗を折伏すること雷の如し。念仏はこれ無間の業、禪は則これ魔界、真言は国家を喪ひ、律宗は盜賊たり<sup>46</sup>。

いずれも『真実伝』と同様に、説法の内容は諸宗を批判する日蓮の四箇格言である。さらに、「今この大法を用ゐずして、後悔すな後悔すなと頻りに説給ふから、聞人不測に耳を側つ」<sup>47</sup>と、日蓮の説法に耳を傾ける人々の様子をうかがうことができる。

冠賢一は、『真実伝』が日潮（1674～1748）の『本化別頭仏祖統紀』（全38巻、1731年、以下『仏祖統紀』）→『日蓮上人一代図絵』→『日蓮大士真実伝』の系譜によって成立したと考察する<sup>48</sup>。確かに『仏祖統紀』の漢文を平易に書き下ろしたのが『一代図絵』であり、四箇格言の説法の2箇所は『仏祖統紀』では次のようになっている。

高祖重而揚旗頻攻敵城以大音声告曰念仏者無間地獄之業也禪宗者天魔波旬之徒也真言者喪身亡国之法也律宗者村落国邑之賊也<sup>49</sup>

折伏若雷念仏は無間禪徒是魔界真言喪国家律宗為盜賊<sup>50</sup>

以上のところは『一代図絵』と『真実伝』での描写とほぼ同様である。ただし、「辻説法」という語は使われておらず、説法が屋外であるとする描写は確認できない<sup>51</sup>。

泰堂は『真実伝』を執筆した際に『一代図絵』を底本とし、全体の構成を変えていないと指摘される<sup>52</sup>。したがって『真実伝』で四箇格言を叫ぶ日蓮の描写は、『一代図絵』を下敷にしていると思われる。さらに遡れば、『仏祖統紀』にそのルーツをみることができる。

なお、日蓮は声大きいことについて末木文美士は、日蓮が遺文で自分について用いる「大高声」や「大音声」という表現に注目する<sup>53</sup>。日蓮自身がいわば自己物語化しているのである。泰堂の伝記における日蓮の動作の描写は、遺文から得たイメージでもあることが、十分考えられる。

## 2. 田中智学と「日蓮上人辻説法跡」—近代における靈跡の「復興」と辻説法のイメージ—

野に叫ぶ予言者の声といふ事を言ひますが日蓮聖人が鎌倉の街頭で思想国難を叫び、宗教亡国を叫んだ時ほど革命的の叫びは曾つて一度もなかったのです。だから辻説法は日蓮聖人をあらかず最上の表現法として用ひられて来たわけです。何れだけ絵に描かれ、劇に演じられて来たことでしやう。しかし辻説法のことを絵にもかき劇にも演じるやうになったのはやはり田中先生が辻説法の旧跡を復興したり、その事跡を天下に宣伝した事が大いに原因となつてゐるやうです。明治以前の芝居や絵には辻説法の場面はありません。辻説法の事跡に世人が注目するやうになったのは、思想的に日蓮聖人を見るやうになってからのことです。高山樗牛などもその方の一人と言はねばなりません。門もなく堂もなく苔むした腰かけ石と題目の石碑に無限の威力があります<sup>54</sup>。

多くの伝記本や絵画、歌舞伎などの演劇を調査した田中智学の門下、星野武男（1893～1969）がここで述べているように、明治以前に辻説法は演目や画題とされることがなかった。やはり、田中智学が1901年に鎌倉小町で顕彰碑を建立して以後、日蓮独特の布教方法として宣伝されるようになり、辻説法の表現は後述する鷗外の戯曲や九浦の絵画に現れていく。先に紹介したように、辻説法の由来を検討した高木豊は、まさにこの点に注目した。

### （1） 智学の略歴と顕彰碑の設置にいたるまでの経緯

ここで、田中智学（1861～1939、以下、智学）の略歴<sup>55</sup>を紹介しておこう。

智学は江戸の日本橋で生まれ、本名は巴之助である。熱烈な法華信者である父親の影響を受けて育った。幼くして両親を失い、8歳の時に日蓮宗寺院の妙覚寺で出家得度した。師僧である河瀬日進（智境院）から智学の法名を授かった。日進は説教の大家として知られており、1873年ごろ、芝増上寺の大教院で大集会が行われた時、得意な繰り弁を披露し、神官や各宗僧侶を驚かせ、国学者の堀秀成を辟易させたという<sup>56</sup>。のちに街頭演説で雄弁を振るっていく智学は、師僧の説教術から多く学んでいる。

智学はその後、飯高檀林や日蓮宗大教院という宗門の教育機関で学んだが、その学風に疑問を覚え、1879年、18歳で還俗する。以後、在家の立場で活動していく。1880年に横浜で数名の同志と蓮華会という日蓮仏教の研究会を結成し、1884年には東京に進出し立正安国会を創設する。そして、1914年に国柱会に改称する。

それでは、現在も鎌倉小町にある「日蓮上人辻説法跡」の顕彰碑の設置にいたるまでの経緯<sup>57</sup>をみていこう。

智学の晩年の回顧によれば、彼は初めて靈跡参拝のために鎌倉を訪れたのは、1877年、17



歳のころだという<sup>58</sup>。廃寺となった妙勝寺の門石のそばに「日蓮大菩薩御腰掛石」という標石と腰掛石を見て「子供の玩具同様に」されていることに憤慨し、その気持ちを詩に託した<sup>59</sup>。

1886年7月、智学は泰堂の遺族を訪問し、泰堂に日文という日号（法号）を迫贈する。その時、小川家から泰堂の蔵書を託されたという<sup>60</sup>。その後、小川一家が立正安国会に入会し、1896年には泰堂の孫である泰子（1879～1955）が後妻に迎えられる。智学にとっては、泰堂が単に先駆的な在家信徒で日蓮遺文の校訂者や有名な伝記の作成者としてだけでなく、親戚として身近な存在で尊敬する人物だった。

1896年8月、田中一家が鎌倉に移住する。3ヶ月後、ある問題をきっかけに智学は門下や立正安国会の会員を鎌倉に召集し、11月29日に参集した一同を鎌倉小町に案内する。即座に「獅子座石保存会」が成立（発起人9人）。しばらく進展がなく、5年後、発起人のひとりである鷺塚清次郎（裕福な筆筒商）が、母の菩提のために発願し、「復興」行事が決定する。鷺塚は土地購入などの整備費、数千円の費用を全額負担し、智学の意匠にもとづいて霊跡を整備する。そして1901年9月10日、念願の「復興式」が開催されるのである。

ところで、1896年11月に智学が召集をかけたのは、いわゆる四箇格言問題について協議するためだった。四箇格言問題とは、『仏教各宗綱要』の見本版から、日蓮宗妙満寺派に無断で四箇格言の項目が削除されたことを、同派代理の本多日生（1867～1931）が問うたことに端を発する問題である<sup>61</sup>。妙満寺派が仏教各宗協会会長の大谷光尊や編集メンバーの島地黙雷などに対して訴訟を起こしたのは、1896年10月12日であった。告訴から約1ヶ月後となる11月17日に京都で臨時大会が行われた。そこで仏教各宗協会によって四箇格言の削除を認める議案が可決され、妙満寺派の綱要自体が削除された形で『仏教各宗綱要』の発売が決定した。

この問題を受けて智学が召集をかけたわけである。折伏重視の思想と活動を展開した彼は、折伏の標語である四箇格言の削除を見過ごすことができなかった。協議した結果、事態を見守ることになったが、おそらく、参集した一同の熱気は、鎌倉小町の腰掛石に案内された時にピークに達したのだろう。その場で成立した「獅子座石保存会」は、やがて顕彰碑の設置に結実していくのである。

## （2）街頭演説の実践

「復興式」の様子とその後の展開を考察する前に、ここで智学自身とその門下が実践した街頭演説に触れておきたい。なぜなら、日蓮の辻説法をめぐる語りは彼ら自身の思想と行動を反映しているからである。

智学の街頭演説が話題を呼んだのは、「復興式」のおよそ10年前、1891年8月。同月1日より5日間、智学は東京に進出した最初期から彼に共鳴した日蓮宗僧侶の溝口太連や、智学

門下の伊東武彦、保坂麗山などとともに、東京の各地で「道路演説」を行い、周囲を賑わせた。演説した場所は次の通りである<sup>62</sup>。

- 1日、神田萬世橋の傍の空き地、上野公園彰義隊墓の大樹の下。綱領300余枚配布。
- 2日、浅草公園。綱領500余枚配布。警官の調べを受ける。
- 3日、芝公園増上寺門前。綱領200余枚配布。警官の調べを受ける。
- 4日、牛込神楽坂毘沙門天の境内、九段坂上靖国神社の傍。九段坂は5日間の演説中で最も盛況。綱領の枚数が足りず。
- 5日、上野公園大仏の傍、神田萬世橋の傍。警官の注意を受ける。

度々警官から注意や調べを受けながらも、東京の住民を相手にした街頭演説は、そもそもなぜ実践されたのだろうか。実は、その背景には、1891年6月13日に発生した「元寇予言否定説」をめぐる問題があった<sup>63</sup>。同日、史学会会員の小倉秀貫（1855～1896）は、神田一橋外の帝国大学講義室で開かれた同会の例会で、「日蓮は元寇の予言者と謂ふを得べき乎」と題する公開講演を行った。日蓮の『立正安国論』は蒙古襲来を予言したのではなく、ただの「平凡迂腐の利己論」だと批判した。だが、講演の開催は新聞で告知されたにもかかわらず、日蓮宗関係者の来聴者はおらず、小倉の主張に反論する者がいなかった。そこで、この講演を聴講し、宗門の無反応に憤慨した智学は、宗門革命祖道復古義会を設立し、運動の一環として街頭演説を行うことにしたのである。

この街頭演説は各方面から注目され、例えば、『國民新聞』（1891年8月1日付）は、上野不忍池湖畔での演説の様子を、「今日蓮いまにちれんの帰り咲」と題して挿絵（蓮の池の背後に日が昇る構図の絵）を付して報じた<sup>64</sup>。また、『反省会雑誌』の雑報欄は、智学が「元寇云々反駁を一身に引受け」、東京の「各街各辻」で街頭演説を行うと報道した<sup>65</sup>。それによれば、智学は「一は宗門革命云々の語を記し一は和歌を記す」「白旗二流」を翻し、水色の帽子に水色の麻紋付羽織、仙台平の袴に草鞋といういでたち<sup>66</sup>で、3名の僧侶（おそらく伊東、保坂、溝口のことだが、保坂は元僧侶、伊東は士族で僧侶ではない）と連れ立ち、2名の人夫にそれぞれ上記の旗をひとつずつ持たせ、演説したという。同様の内容が『郵便報知新聞』（1891年8月6日付）でも報道されており、白旗は「六尺余」（約1.8メートル）ほどの大きさだったという<sup>67</sup>。

智学が街頭演説という布教方法を選んだのには実用的な理由もあった。新聞の広告やポスター、立て看板などの費用がかからないからである<sup>68</sup>。また、晩年の回顧ではあるが、街頭演説する時は、「雄大な情操が湧いて来る、恍惚とした観念が湧いて来る」、「俗界のすべての心をぬぐひ去ってしまつて、心地朗々として痛快いふべからざるものがあつた」という内面的な効果も重要だった<sup>69</sup>。

「復興式」の翌年、智学の代理で門下の桑原智郁は、立教開宗650年にちなんで、1902年1月から12月にかけて、1年間にわたって「帝都道路布教」を行った。桑原も、「天にも昇り候ほどの愉快たしかに小生の命を延ばしたる心地在り終生忘れがたく相悦び申候」と、高揚した気持ちを書き残している<sup>70</sup>。

要するに、智学やその門下は日蓮の辻説法を街頭演説の形で再現し、日蓮になり切る体験を通して信仰を深めていた。街頭演説はいわば修行であり、修養であった。

ところで、先述したように、智学は街頭演説の際に旗を持参していた。門下の桑原も、南無妙法蓮華経と記された「玄題旗」という、縮緬でできた赤い旗を常に持ち歩き、警官と押し問答になるほど、非常に大事にしていた。明治天皇の鳳輦通過の際に巡査に注意され、赤い旗を他のところに置くように言われても、「此旗は小生が宗教上の信念を標示するものなり人民が宗教的信念を標示して吾が 大君の御通輦を拝観し奉ることを禁ずる法律ありや若しあれば示されよ」、さらに続けて、この旗は「吾が命なり 陛下に対し奉る最上の礼儀なり死すとも他に持ち去らず」と断った<sup>71</sup>。

さらに桑原が市中の子どもたちに「加藤清正の二代目」<sup>72</sup>と言われた点が興味深い。これはつまり、1902年にはまだ日蓮の辻説法と旗のイメージが結びついておらず、むしろ一般的に知られていたのが、戦国の武将、加藤清正だったことを物語る。清正は戦の時に「題目旗」と呼ばれる南無妙法蓮華経と書かれたのほり旗を翻し戦ったといわれ、「清正公さん」の名で庶民の間で広く親しまれていた<sup>73</sup>。したがって、「辻説法跡」の顕彰碑が設置されたばかりで、また、絵の表現においてまだ日蓮の辻説法のイメージは定着していないころには、桑原は「加藤清正の二代目」と呼ばれていたのである。辻説法と結びついた題目旗のイメージの定着は、後述する野田九浦の絵画の影響が大きいと思われる。

ここで、次の智学の回顧に注目したい。「何百年来跡を絶った街頭演説の断絃を継いだ」、「当時仏教各宗の布教伝道に街頭演説を行ふといふ事は一個の水谷仁海翁<sup>かごんぜつ</sup>の駕演説を除くの外殆ど絶無であった」、と智学は振り返る<sup>74</sup>。

水谷仁海（1836～1896）は、天台宗の僧侶で、仏教改良を主張した人物である。『令知会雑誌』の記事<sup>75</sup>によれば、「五十余歳の高齡なる」水谷は、1887年12月2日に四輪車に乗って郷里（備中国浅口郡柏島村）を出発し、途中で人に会えば車中に立って説教しつつ、1888年1月1日に東京に着いたという。水谷は本郷の吉祥寺で「頻に自得の新仏教を演説し聞く者も其熱心勇為には感服」しており、さらに東京の町々で「路頭に立て演説」した。水谷の演説は、各方面にインパクトを与えたようである。智学はその四輪車での演説を「駕演説」と評したのである。

智学はのちに『宗門之維新』（1901年）などの著作で水谷に言及しており、先に紹介した晩年の回顧でも触れている<sup>76</sup>。つまり、街頭演説の実践には、少なくとも水谷の先例があり、智学はそれを意識したのである。

さらにいえば、街頭ではないが屋外演説の早い例としては、東京基督教青年会が1880年10月に東京上野の精養軒の庭で、数千人規模の屋外大演説会を開催したことが挙げられる<sup>77</sup>。また大規模な伝道活動で知られるプロテスタント一派の救世軍は1895年に日本布教を開始し、のちに説教隊を作って各地で「野戦」とよばれる野外説教を行っていた<sup>78</sup>。1897年1月、大喪中にもかかわらず、「表町の四つ角に立ち」、演説を行ったことが原因で、警察署に連れて行かれ、山室軍平（1872～1940）などは拘引されることもあった<sup>79</sup>。ちなみに先に紹介した智学の門下、桑原は外国人に救世軍の説教者と間違えられることがあった<sup>80</sup>。つまり、街頭演説と救世軍のイメージが深く結びついていたのである。

なお、警察から退去が求められる経験から、智学らは一策を講じ、「警官応接係」というひとりのメンバーを決め、その人が警官に対応している間、他のメンバーは演説を続けたという<sup>81</sup>。公共空間として道路や街頭、公園などが整備されていく中、そこで実践される布教や伝道活動が取締の対象となった。街頭布教は近代における「公」と「私」の領域や、宗教と国家の関係を考える上で示唆に富むが、本稿で考察する余裕はないので、今後の検討課題としたい。

こうして、1880～1890年代には、活発な伝道活動を行うキリスト教側の、例えば演説や印刷物の配布という実践に対して、仏教側が非常に敏感だった<sup>82</sup>。智学はもちろん例に漏れず、それらの動向に注視していた。印刷物の配布の作戦も入念に考え、演説の際に必ずチラシや冊子などを配布していた。のちにそれを担当したのが、主に盛装した婦人だった。なるべく若い女性、「美人ならば尚いい」という条件で選ばれたという<sup>83</sup>。

以上で紹介した智学の街頭演説の実践は、やがて日蓮の辻説法に投影されていく。つまり、顕彰碑の設置の前に、先に街頭演説の実践があった。智学は、その時の自分自身の実体験を日蓮の辻説法の語りに重ねていくのである。

### （3）「復興式」

公園風に整備され、石垣で囲まれた10坪ほどの空間が、現在も鎌倉市小町2丁目22あたりにある。智学が顕彰碑を建てた場所である。正面中央に腰掛石が置かれており、その真後ろに題目の宝塔、そして右には「日蓮大士辻説法之靈跡」と記された高さ約2メートルの標柱、左にはびっしりと楷書で埋められた、同じく高さ約2メートルの石碑が立っている。碑文は智学が漢文体で書いたものを、発願主である鷲塚清次郎の親友で、書家の秋山碧城が謹書し、それを石工の鱸<sup>すずきもうりん</sup>猛麟が刻字したものである<sup>84</sup>。

さて、「復興式」に戻ろう。

「復興」に至るまでの経緯や「復興式」の詳細は、立正安国会の機関誌『妙宗』で掲載されている。山川智応が編纂した「日蓮大士鎌倉辻説法御靈跡復興縁起」（以下、「復興縁起」）<sup>85</sup>という、全26頁の長文で確認できる。題目の「大士」からは泰堂の『日蓮大士真実伝』

の影響がみてとれ、「縁起」という呼称は、寺院などの霊跡を想起させる。内容は「聖祖辻説法の由来」、「御腰掛石の伝来」、「復興発願」、「地域の認定及び購入の顛末」、「工事の設計」、「復興式」からなっており、「復興式」の準備や式中の光景、来賓の祝辞や碑文（漢文と書き下し）まで、事細かく収録されている。

では、式典の様子<sup>86</sup>をみてみよう。

1901年9月10日、午前11時半、「復興式」が始まった。開会式、参列者一同着席、奏楽、開式宣言に続き、発願主の鷺塚が、「霊石の前に進み、肅拝し跪いて除幕」<sup>87</sup>を行った。続いて智学の式辞や来賓の祝辞があり、式典のクライマックスである鷺塚による碑文の朗読が行われた。万歳三唱の後に、音楽を奏でながら第二式場（妙本寺）に移り、そこで智学と鷺塚から謝意の言葉が述べられた後、守本文静（当時は妙本寺の住職）が式典の終了を告げた。一同は茶菓や弁当を供され、午後4時、「随意散会」の形で「復興式」が終わった。

「復興式」で最も感動を与え、語り草となったのが、鷺塚による碑文の朗読である。「感究まって声絶え、嗚咽痛哭、歎音微かに漏る、満場の僧俗、一人の面を挙げ得たるものなく、顔を蔽うて哭くものあるに至る」<sup>88</sup>と、鷺塚は朗読中に号泣し、参列者の中にも、もらい泣きする人々が見受けられたという。参列した山川も、「一場の神聖浄潔なりしと亦忘るべからず」、「歡涙抑へがたし」と、その時の感動を「復興縁起」の中で記している<sup>89</sup>。

智学の門下や立正安国会の会員が感動した理由はもうひとつあった。当日の天気である。「復興式」の翌日、1901年9月11日は、ちょうど「二百二十日」にあたる日だったからである。二百二十日は、伝統的に台風の襲来が多い厄日として警戒されていた。二百二十日の前日、「復興式」の日も、天候が陰悪なると思われていた。そのことで気が気でない山川に智学はこう話した。

法華経は宇宙の大法なり、われ等苟も法華経を奉じ、その法規にしたがひて法華経の大仏事を行ぜんとす、これ宇宙の大法を光揚せんとするなり、風や雨や天や地や、宇宙間のもの、なんぞその大法光揚を沮せん、（中略）この霊跡復興の大仏事は、即ち是れ大祈禱なり、雨なきを祈るが如きは、汝、信薄きが故なり、省みよと<sup>90</sup>。

いかにも自信に満ちた説明にみえるが、当の智学は晩年に「冗談半分にいっただんでもない、確たる拠り所もないがさういった」<sup>91</sup>と打ち明けている。

果たして当日は快晴だった。しかも、式典で朗読するために智学が前もって準備した「復興式の辞」の原稿は、「明治卅四年九月十日天気晴れて気清し」という書き出しで始まっており、実際にその通り、晴天となった<sup>92</sup>。

当日の来賓参列者は総じて80余名を数え、立正安国会の会員、日蓮宗管長の久保田日亀や各本山の僧侶だけでなく、神奈川県知事の周布公平、神奈川県師範学校長の久保田貞則、鎌

倉町長の犬山初蔵、鎌倉警察長の石井達、鎌倉銀行頭取の村田久吉など、行政・教育・金融といった分野の人物や地元の名望家など、日蓮信奉者でない多くの人々が参列した。周知事は午後には退席の予定だったが、式典中に考え直し、結局は式が終わるまで出席した。

ちなみに「復興式」の発端となった四箇格言削除問題の中心人物、本多日生も列席した。来賓として祝文を朗読し、「嗚呼聖祖去りて六百有余年聖人が献身的大志願は今猶我国の間にすら実現せらるるに至らず今や空しく辻説法の古跡に詣でて聖祖当年の言動を追懐し万感胸を衝き來りて復た言ふ所を知らず」<sup>93</sup>と、祝辞を締めくくっている。すなわち、式当日、「辻説法の古跡」は、日蓮の言動を追憶するための場所としてすでに機能し始めている。そして以後、日蓮門下にとっては自分を奮い立たせる特別な場所となっていくのである<sup>94</sup>。

『読売新聞』は当日、いち早く式の盛況を報じた。「日蓮上人鎌倉小町辻説法は歴史上著名の事」と、辻説法は史実であると印象づけ、「厳肅なる復興式を挙げ併せて古跡を無視する地方的弊習を矯正する筈なり」と、地域の史跡保存の模範として取り上げた<sup>95</sup>。『朝日新聞』は、「日蓮辻説法旧跡の建碑」と題して紹介した。ここでは「鎌倉の名物の一数へらるる日蓮上人辻説法の場所」<sup>96</sup>と、さっそく「鎌倉の名物」のひとつに数えられている。

#### (4) 「復興式」後一演目と画題としての辻説法一

本稿のまとめに入る前に、冒頭で触れた高木豊の注目点、すなわち辻説法を題材にした森鷗外の戯曲と野田九浦の絵画を紹介しておこう。

「復興式」の翌月、さっそく真砂座で中幕のひとつとして、演目名に初めて「辻説法」という語が使われた「にちれんつじせっぽう日蓮辻説法」松葉ヶ谷草庵、小町の里辻説法」が上演された<sup>97</sup>。この演目や上演の詳細は不明だが、劇評家の鈴木春浦はこの時真砂座で演じられた脚本を、のちに鷗外に見せて書き直してもらったと証言しており、鷗外はその中の松葉ヶ谷草庵の部分を描かず、辻説法にのみ焦点を絞ったとされる<sup>98</sup>。そして1904年3月、鷗外の実弟である三木竹二（1867～1908）が主宰する雑誌『歌舞伎』の臨時刊行号（第47号）に「にちれんしょうにんつじせっぽう日蓮聖人辻説法」という戯曲を発表した<sup>99</sup>。

同号には衣装や道具についての久保田米僊（1852～1906）による説明が載っており、「橋の側に捨石」、「問答中日蓮の腰掛に用ゐる」、「口碑に日蓮上人腰掛石といふものあり」という記述がみえる<sup>100</sup>。典拠が記されていないが、米僊は時代考証を行った際に腰掛石の伝承を取り入れたことが読み取れる。そして、上演の際は、実際に舞台の中央に、舞台美術を担当した「[久保田] 米斎君の注文で自然に近い形に出来て居た」<sup>101</sup>捨石が置かれ、劇中、雪が降る中、日蓮が「捨石に腰を掛け、他国侵逼難のいはれを説く」<sup>102</sup>演出がなされていた。集まった群衆が日蓮に向かって石を投げる演出も、『真実伝』での描写と一致していることから、同書が参考資料のひとつであった可能性が高い。

1904年4月1日より、「日蓮聖人辻説法」が中幕的一幕物の演目として歌舞伎座で初演<sup>103</sup>

され、大きな話題を呼んだ。中幕は観客の気分を変えるため舞踊劇などの華やかなものや感情に訴える時代物が一般的だったが、本作は華やかでもなく、起伏の激しいストーリーでもなかった<sup>104</sup>。したがって、本作は賛否両論を呼び、評論家の意見が分かれた<sup>105</sup>。

さて、鷗外は創作にあたって泰堂の『真実伝』を参照したとされる<sup>106</sup>が、独自の解釈や『真実伝』にない描写も加えていると指摘される（後述）。とりわけ、時系列を組み替えて日蓮の『立正安国論』を辻説法の場面に持ち込んだことがよく知られている。発表時期がまさに日露戦争の開戦直後だったこともあり、これまでの研究では、本作の意図は、日蓮が危惧した蒙古侵略と重ねられ、主に日露戦争との関係において解釈されてきた<sup>107</sup>。

しかし、近年、岩谷泰之は、新たな解釈の可能性を指摘している。「国家の衰退、政道の善悪は、むざと言ふべきではおられない」<sup>108</sup>と作中に語る日蓮に注目し、岩谷は国家のことについて声を潜める日蓮の描写は、泰堂の『真実伝』にはなく、鷗外の独自の解釈による表現だとする<sup>109</sup>。ここで鷗外は日蓮の姿を通して、内務省訓令第507号（1900年5月12日公布）によって当時取締りの対象とされた僧侶の街頭での説法を、舞台上に再現したと、岩谷は考察する<sup>110</sup>。

確かに先述したように、仏教者やキリスト者の屋外での説法や説教は、度々警察との押し問答に発展し、拘束を受けることもあり、新聞等のメディアでよく取り上げられた。つまり、世間的に注目を集めていた問題のひとつだったといえよう。岩谷が指摘するように本作品では、国家によって取り締まられていた街頭での説法を、鷗外は日蓮の辻説法に託し、なおかつ国家のことをとやかく言うべきではないとわざわざ言わせることによって、ある種のカモフラージュをしている、という本作の解釈も考えられる<sup>111</sup>。

なお、管見の限り、鷗外本人や扮装などの時代考証を行った米僊、そして雑誌や新聞で次々と劇評を発表した評論家たちは、辻説法の史実そのものを検討しておらず、むしろ辻説法が実際に鎌倉で行われたという前提に立っている。「復興式」の3年後、辻説法は、もはや疑う余地がない「事実」になっていたのである。

続いて、野田九浦（1879～1971、以下、九浦）の絵画を取り上げよう。

1907年10月から11月にかけて、上野公園の元東京勸業博覧会美術館で第1回文部省美術展覧会（以下、文展）が開催された。この文展は入場者数が4万人を超え、成功したと報じられた<sup>112</sup>。そして、日本画部門で二等賞を受賞し文部省買い上げとなり、一躍有名になったのが、九浦である。彼の「辻説法」（図3）は、日蓮の辻説法の視覚的イメージに、大きな影響を与えた作品だと思われる。なお同年、九浦は大阪朝日新聞社に入り、夏目漱石作「坑夫」の挿絵を担当することになる。

さて、画面中央のやや右寄りのところに袈裟を着て草鞋を履いている日蓮の姿がみえる。法華経と数珠を手に持ち、後ろには南無妙法蓮華経と記された旗がなびいている。九浦はどのような資料から題目旗のイメージを得たかは今後の検討課題だが、この旗の表現こそ、辻

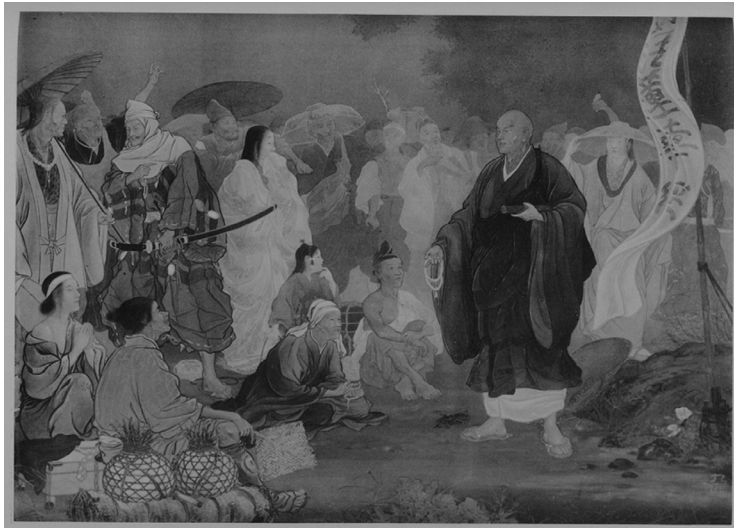


図3 野田九浦「辻説法」(東京国立近代美術館蔵)

(<https://www.tobunken.go.jp>より転載)

説法の描写に欠かせないアイテムとなり、現在も漫画<sup>113</sup>などでみられる。こうしたイメージを定着させたのは、本作品である可能性が極めて高い。

九浦はさらに、日蓮だけでなく、説法を聴きに集まった群衆の表現にこだわり、細部までその様子を描いている。腰を下ろして説法に聴き入る人々や、肩をあらわにして合掌する女性、太刀を持つ武士や、何か反論しようとする僧侶など、日蓮の聴衆の身分は実に様々で、しかも女性が多い。「人物の様子をかき現はしたものではありません、場中第一等」と、登場人物の一人一人の表情や感情などの描写は、この作品が高く評価された点である<sup>114</sup>。

だが、主人公である日蓮は、少なくとも智学や彼の門下がイメージした姿からは、大きくかけ離れていたようで、智学は第1回文展で「尤も敬服した」日本画(3点)については記しているが、九浦の作品には一切触れていない<sup>115</sup>。また、門下の山川智応はのちに次の評価を述べている。

野田九浦といふ画家があつて、この人が日蓮聖人の辻説法の画をかいて、ずっと前に文部省の展覧会に当選したことがある。それを見ますと、聖人が草鞋履きで、題目の旗の下で辻説法をして居らるるのだが、粗豪といった感じで、壮士の親方みたいな風なところがあるんです。けれども日蓮聖人が、果たしてそんな壮士の親方みたいな人であつたかといふと、豈図らんや日蓮聖人は、非常に文雅の才のあつた方であります。そして非常に礼儀が正しく、粗野なことを厭はれた方であります<sup>116</sup>。

九浦は寺崎廣業に師事し、東京美術学校で日本画を、さらに白馬会研究所では黒田清輝に



洋画を学んでいる。第1回文展の出品作については、「丁度日蓮真実伝を読みつづけて居たので、辻説法と画題を定め、日蓮画像の探索に之つとめた。(中略)日蓮宗の寺と聞くと其処此処と訪ねて歩行いた。有合わせの布で仮装の衣掌を作ってもらって、モデル写生に没頭した」<sup>117</sup>と、後に語っている。この回想で九浦は、泰堂の『真実伝』を読んで画題を決めたこと、そして、日蓮の姿を描くにあたってモデル写生を行なったと述べている点がとりわけ重要である。

あるいは九浦が日蓮宗寺院に伝わる日蓮絵像を参照しながらも、基本的にはモデル写生にもとづいているため、本作品では日蓮の姿が尊い高僧の印象よりも、人間的で体格がいい、山川の言う「壮士の親方」という印象を与える表現になっているかもしれない。すなわち畏怖の念や敬虔な気持ちを抱かせるよりは、豪傑で逞しいと思わせる描写となっているから、山川は「粗豪」と評したのであろう。こうした評価からは、芸術家が表現する日蓮と、信者が思い描く日蓮との間では、大きな隔たりがあったことがみてとれる。

## おわりに

以上、日蓮を代表するイメージのひとつ、辻説法に焦点を当て、その構築過程の一端を考察してきた。最後に本稿で明らかになった点を整理し、いくつかの論点を示しながら、今後の課題を述べていきたい。

まず、先行研究では史実でないことが以前から指摘されているにもかかわらず、辻説法の語りやイメージの由来はほとんど検討されてこなかったことを出発点とし、本稿では、高木豊の先駆的な研究を検討しつつ、新たに判明した重要な要素として、近世末期の小川泰堂による『日蓮大士真実伝』を取り上げた。この伝記こそ、近代以降、語られ続ける辻説法の原型である。ただし、泰堂が伝記に取り入れた腰掛石伝承については、検討すべき点が多く、今後の課題である。

なお、先行研究では、『真実伝』における「救国の愛国者」としての描写が明治以降広まっていた日蓮像の定着に大きく寄与したとすでに指摘されている<sup>118</sup>が、辻説法する日蓮像の定着にも、『真実伝』の与えた影響が大きい、と改めて強調しておきたい。『真実伝』は、近世と近現代における日蓮像の連続性／非連続性を考える上で、極めて重要な史料である。

また、『真実伝』における辻説法の場面は、近世の日蓮伝記本でよくみられる奇瑞や夢想譚とは違い、神秘的な祖師としての日蓮像を強調するためのものではない点に注目すべきである。近世の他の伝記と同様に『真実伝』には日蓮の霊力を示すための描写が多くみえるが、辻説法の場面ではそれがみられず、他宗派を批判し自分の主張を堂々と述べる日蓮に焦点が当てられている。換言すれば、近代以降、日蓮の辻説法が強調されるようになった時、奇瑞伝承とは異なり、「史実」として違和感なく受け入れやすい場面であり、さらにいえば、そ

それぞれの意図に合わせた語りを盛り込みやすい場面でもあるといえる。つまり、異なった語り方の検討には格好の研究材料である。

次に、『真実伝』の史料紹介に続き、顕彰碑の設置に至るまでの経緯と「復興式」について詳述した。まず、顕彰碑の設置については直接の契機が1896年に発生した四箇格言削除問題であったことを述べた。そして、近代における辻説法の語りの浮上につながる道筋は、実はこれより5年前、1891年に発生した「元寇予言否定説」をめぐる問題をきっかけに智学が実践した街頭演説にすでにみえはじめていたことを明らかにした。本稿では、やがて顕彰碑の設置に結実していく過程の起点として街頭演説の実践を詳しく取り上げた。そして、1901年以降、智学が「復興」した「日蓮大士辻説法之靈跡」は、辻説法のいわば記憶装置として機能し続け、日蓮像の構築と定着に大きな役割を果たしていったと思われるが、この点は今後さらに考察していきたい。

なお、現在も鎌倉に行けば、「辻説法跡」を訪れることができる。さらに近年、宗教法人日蓮宗がその隣に布教施設を建設し、2022年1月に一般利用の開始を予定している。「日蓮聖人と時空を超えた心の対話ができる場所」をコンセプトに建設したという<sup>119</sup>。ただこれに関連して、日蓮信奉者の視点だけでなく、日蓮に関連する霊跡を「歴史」として取り込んだ地域の観点を導入する必要があると指摘しておきたい。実際、「復興式」には神奈川県知事や師範学校長、鎌倉町長や警察長などが列席している。観光名所としての「辻説法跡」の機能とともに近代の地域社会の中で日蓮像が持つ意味を検討しなければならない。

そして、本稿が最後に取り上げたのは鴟外の戯曲と九浦の絵である。この二つの作品は『真実伝』での描写に依拠している点が重要だが、さらに、辻説法のイメージをクローズアップした智学などの日蓮信奉者と必ずしも関係のない、様々なメディアを通して日蓮像が再生産されていった事例として注目すべきである。

このように、辻説法のイメージは、伝承文化や出版文化を通して近世末期から近代へと受け継がれ、近代に入ってからには式典などの顕彰イベント、顕彰碑、芸能や美術での表現などによってさらに広く普及していったが、本稿で取り上げた時期以降、現在に至るまで、多種多様なメディア（特にビジュアルなものとしては絵葉書、映画、漫画など）の影響も視野に入れ、それぞれのメディアの特性を踏まえて幅広く検討する必要がある。

なお、本稿で論及することができなかったが、近代における辻説法の語りは、宗教家や思想家、文学者、評論家など、異なる立場の人々によって数多く発表された日蓮についての研究書や評伝、文学作品を通して流通し、辻説法が史実であるかのようなイメージを定着させた一因であると考えられる<sup>120</sup>。だが、こうした語りは日蓮の実像ではないから検討する価値がない、ということにはならない。語られる日蓮には、語り手の心象が投影され、それぞれの意図が隠されている。日蓮の辻説法をめぐる語りは語り手の自画像を映し出すのである。

近年、親鸞像や親鸞の語られ方が大きく注目され、研究が著しく発展しているが、近代以

降、構築され、広まっていった日蓮像もまた、近現代の日本人の精神史を探る上で、重要な参照点のひとつである。この点については稿を改めて詳細に検討していきたい。

註

- 1 佐藤賢一『日蓮』（新潮社、2021年）、50頁。
- 2 英語のタイトルは*The Passion of Nichiren*である。もともとは『小説新潮』で2020年6月号から翌年1月号にかけて掲載された「パッション」という作品である。佐藤賢一は、1968年、山形県鶴岡市生まれ、東北大学大学院でフランス中世史を専攻し、とくにフランス史を題材とする小説を多数発表している。直木賞や司馬遼太郎賞等受賞作品もある。
- 3 鎌倉妙法寺の日澄（1441～1510）が著した伝記とされる。日澄は日蓮の直弟子の日朗の流れをひく、京都本国寺（のちの本圀寺）系の出身である。『日蓮聖人註画讃』は、全5巻32項目にわたり、日蓮の生涯を絵と漢文の絵詞で書き表した絵巻物で、日蓮伝記の最初の絵詞伝である。原本は存在しないが、日澄の没後、1536年に制作された漢文体・極色彩のものが京都本圀寺に現存しており、原本に最も近いとされる。もっぱら筆写によって流布したが、1601年に刊行本が出てから、漢文体・和文体の初版が相次ぎ、とくに和文体を種本にした類似の日蓮伝記が数多く制作・刊行されていった。冠賢一「解題」（近世文学書誌研究会編『近世文学資料類従 仮名草子編（15）日蓮聖人註画讃』勉誠社、1973年）、同「『日蓮聖人註画讃』の一考察」（野村耀昌編『法華信仰の諸形態』平楽寺書店、1976年）を参照。現存本の多くを収録した貴重な資料集として、川添昭二・中尾堯・渡辺宝陽・坂輪宣敬監修『日蓮聖人と法華の至宝 図説 第7巻 日蓮聖人註画讃』（同朋舎メディアプラン、2014年）が挙げられる。
- 4 三浦勝男「鎌倉における日蓮《布教と迫害》」（『歴史読本』第26巻第9号（700遠忌記念特集号）、新人物往来社、1981年7月）、64頁。
- 5 中尾堯『日蓮』（吉川弘文館、2001年）、70頁。
- 6 佐藤弘夫『日蓮—われ日本の柱とならむ—』（ミネルヴァ書房、2003年）、73頁。
- 7 石附敏幸「日蓮と法華講会」（花野充道博士古稀記念論文集刊行会編『日蓮仏教とその展開』山喜房佛書林、2020年）。
- 8 同上、538頁。
- 9 高木豊は厳密な史料考証で知られており、彼の論じた日蓮像は、歴史的に客観的な事実のみもとづくものである。伝説的な語りを一切採用しない高木は、自著『日蓮—その行動と思想—』（評論社、1970年）で辻説法を取り上げていないことからその姿勢が窺える。なお、本書は2002年に太田出版から増補改訂版が刊行されている。
- 10 なお、高木は、『国史大辞典』では、日蓮の辻説法のことが近代になって言われるようになったとしているが、『世界大百科事典』および『日本史大事典』では、近世末期の繰り弁に辻説法のことがみえてくるとする。ちなみに、同じく「辻説法」の項目を高木以前に執筆した田村芳朗（『世界大百科事典』第15巻、平凡社、1966年）や中尾堯（『日本大百科全書』小学館、1987年）は、日蓮の辻説法が有名であると述べており、その史実を検証していない。
- 11 高木豊「辻説法」（『世界大百科事典』平凡社、1988年）、562～563頁。
- 12 日蓮や日蓮に関連する人物の伝記を美文化し、リズム化して語る繰り弁は、高座説教とも呼ばれ、浄土真宗の節談説教とともに、近世において隆盛した説教のスタイルである。ありがたさが主体となる口調で、大衆受けする抑揚のある話し方が特徴である。名調子で語られる日蓮伝は近世末期にはほぼ出来上がっていたとされるが、繰り弁という言葉自体が成語化した時期は不明である。繰り弁については以下を参照。影山堯雄『日蓮宗布教の研究』（平楽寺書店、1975年）、守屋日裕上人遺稿集刊行委員会編『高座説教に生きて—伝統を守り続け

た守屋日裕上人一』(日蓮宗新聞社、1992年)、中條暁秀「日蓮宗高座説教の一考察」(小松邦彰先生古稀記念論文集刊行会編『日蓮教学の源流と展開』山喜房佛書林、2009年)。

- 13 繰り弁の研究の難しさは、口伝であることや、説教の下原稿・ネタ本である「話稿本」の秘匿性の問題が指摘されている(中條前掲「日蓮宗高座説教の一考察」、416頁)。話稿本を整理してまとめた資料集は明治に入ってから刊行されたことも注意すべき点である。つまり、明治期の日蓮像が近世末期から伝わるとされる語りのなかに入り込んでいる可能性があり、辻説法はその一例かもしれない。例えば、水村遵祥編『古今大家説教演説集』(全4輯、妙教社、1910～1912年)の第2輯に「辻説法」が収録されているが、水村は智学が1903～1904年に大阪で開催した長期講習会の修了生であり、智学の影響を受けている。高木豊が参照した史料は不明だが、明治以降刊行のものであるならば、繰り弁に辻説法の由来をもとめる説を再考する必要があると考えられる。
- 14 高木前掲「辻説法」(『世界大百科事典』)、562～563頁。
- 15 Donald S. Lopez Jr. *From Stone to Flesh: A Short History of the Buddha*. The University of Chicago Press, 2013; Micah L. Auerback *A Storied Sage: Canon and Creation in the Making of a Japanese Buddha*. The University of Chicago Press, 2016.
- 16 塩谷菊美『語られた親鸞』(法藏館、2011年)、大澤絢子『親鸞「六つの顔」はなぜ生まれたのか』(筑摩選書、2019年)、碧海寿広『考える親鸞—「私は間違っている」から始まる思想—』(新潮選書、2021年)、近藤俊太郎『親鸞とマルクス主義—闘争・イデオロギー・普遍性—』(法藏館、2021年)。
- 17 飯島孝良『語られ続ける一休像—戦後思想史からみる禅文化の諸相—』(ぺりかん社、2021年)。
- 18 熊本英人「劇化された道元—中村吉蔵の道元像と近代曹洞宗—」(『駒澤大學仏學部論集』第34号、駒澤大學佛教學部研究室、2003年)。
- 19 冠賢一「近世後期における「日蓮聖人伝」の出版—小川泰堂を中心とした在家居士の著作活動について—」(『現代宗教研究所所報』第3号、日蓮宗宗務院、1969年)、同『近世日蓮宗出版史研究』(平楽寺書店、1983年)。
- 20 望月真澄「幕末期日蓮伝記本に関する一考察—中村経年著『日蓮上人一代図会』における挿絵と日蓮の足跡に関わる記載事項を中心に—」(冠賢一先生古稀記念論文集刊行会編『日蓮教学教団史論集』山喜房佛書林、2010年)、同「近代日蓮伝記の挿絵考—小川泰堂著『日蓮大士真実伝』を中心に—」(仲澤浩祐博士古稀記念論文集刊行会編『インド仏教史仏教学論叢』山喜房佛書林、2011年)、同「近世後期における日蓮伝記本の一考察—深見要言著『本化高祖紀年録』を中心に—」(『印度學佛教學研究』第126号、日本印度学仏教学会、2012年)など。
- 21 荻野裕子「甲斐駿河における日蓮曼荼羅授与伝説の生成」(『口承文藝研究』第27号、白帝社、2004年)、同「日蓮曼荼羅授与伝説の生成」(『国文学 解釈と鑑賞』第70巻第10号、至文堂、2005年)。
- 22 石川康明『日蓮と近代文学者たち』(ピタカ、1978年)、石川教張『文学作品に表われた日蓮聖人』(国書刊行会、1980年)。
- 23 大谷栄一「日蓮はどのように語られたか?—近代日蓮像の構築過程の文化分析—」(幡鎌一弘編『語られた教祖—近世・近現代の信仰史—』法藏館、2012年)。
- 24 星野健一「「日蓮文学」に関する研究の一考察」(『法華仏教研究』第24号、法華仏教研究会、2017年)、同「福地松痴『日蓮記』考」(『法華仏教研究』第29号、法華仏教研究会、2020年)。
- 25 望月前掲「近代日蓮伝記の挿絵考」、274頁。
- 26 小川泰堂については以下を参照。小川雪夫『小川泰堂伝』(錦正社、1967年)、石川康明「小川泰堂—日蓮大士像の唱導者—」(中濃教篤編『近代日蓮教団の思想家—近代日蓮教団・教学史試論—』国書刊行会、1977年)、師子王文庫編『日蓮主義研究』第5号(小川泰堂居士百年祭記念特集、真世界社、1978年)、ジャクリン・ストーン「維新前後の日蓮宗にみる

- 国家と法華經一小川泰堂を中心に一」（岩田真美・桐原健真編『カミとホトケの幕末維新一交錯する宗教世界一』（法蔵館、2018年）。『真実伝』をはじめ、泰堂の主要な著作は、小川泰堂全集刊行編集委員会編『小川泰堂全集論義篇』（展転社、1991年）に収録されている。
- 27 本書では、「日々の辻説法」、「辻説法の古跡」という言葉が確認できる。小川泰堂「日蓮大士真実伝」（前掲『小川泰堂全集論義篇』）、261・262頁。
- 28 ただし、俗人でありながら、遺文集の校訂のために諸本山や中山法華経寺の宝蔵に入り、自由に日蓮の真筆と対照し得たのは、泰堂が初めてではない。深見要言（生没年不詳）は1800年4月に中山の宝蔵に入ることが許され、遺文集『本化高祖御書』（1808年）を刊行した。泰堂と同様に日蓮の伝記『本化高祖紀年録』（全11巻、1795年）も出版した。なお、同書の第1巻では、日蓮が四箇格言を屋内で説法する場面の描写とそれを表す挿絵は確認できるが、辻説法への言及はみえない。『日蓮聖人伝記全集10 本化高祖紀年録』（山口晃一監修、法華ジャーナル、1987年）、87～90頁を参照。深見要言については、望月前掲「近世後期における日蓮伝記本の一考察」、木村中一「在家者の遺文出版活動—出版活動に込めた祈りと信仰—」（宮川了篤編『日蓮仏教における祈りの構造と展開』山喜房佛書林、2014年）を参照。
- 29 伊原敏郎著、河竹繁俊・吉田暎二編集校訂『歌舞伎年表』第7巻（岩波書店、1962年）、262・317頁。
- 30 小川泰堂前掲「日蓮大士真実伝」、260～261頁。
- 31 日蓮の諸宗折伏を標語化した「念仏無間・禪天魔・真言亡国・律国賊」については、日蓮自身が四箇格言と命名したこともなく、またこの成句を使用したことも僅少であると指摘される。遺文中、四箇格言が揃って述べられているのは、十一通御書の一つ『与建長寺道隆書』（1268年）の「念仏は無間地獄の業、禪宗は天魔の所為、真言は亡国の悪法、律宗は国賊の妄説」や、『諫暁八幡抄』（1280年）の「真言は国をほろぼす、念仏は無間地獄、禪は天魔の所為、律僧は国賊との給ゆへなり」などである。四箇格言が日蓮において揃ったのは佐渡配流以降のことで、鎌倉布教初期の場面でそれらが揃っているとする伝記は、やはり史実を反映していない。浅井円道「四箇格言」（『日蓮宗新・電子聖典』）掲載の電子新版『日蓮宗事典』（2021年）を参照。本聖典は日蓮降誕800年慶讃記念の事業の一環として製作されたものである。
- 32 腰掛石についてはブリタニカ国際大百科事典小項目版をオンライン検索した。なお、日蓮伝説には「法論石」や「高座石」などとよばれる石にまつわる種々の伝説がある。例えば、甲斐駿河における伝説の分布は、荻野前掲「甲斐駿河における日蓮曼荼羅授与伝説の生成」、48～49頁を参照。
- 33 山川智応「吾が結前生後を語る（中） 結前の巻（坤）」（『信人』第82号、信人社、1938年12月）、27頁。
- 34 間宮士信等編『新編相模国風土記稿』第4輯（鳥跡蟹行社、1888年）、48頁。この活字翻刻本は1884年から1888年にかけて洋装本全5冊として刊行されたものである。本稿では同書を国立国会図書館デジタルコレクションで参照した。
- 35 相模国鎌倉郡の廻村調査はさらに早く、1824年4月から8月にかけて行われており、小町は同年5月23日に調査されている。白井哲哉「別表 地誌調出役の廻村調査一覧」（『日本近世地誌編纂史研究』思文閣出版、2004年）、237頁を参照。
- 36 山川前掲「吾が結前生後を語る（中） 結前の巻（坤）」、27頁。
- 37 地誌編纂については、原淳一郎『江戸の旅と出版文化—寺社参詣史の新視覚—』（三弥井書店、2013年）、引野享輔「江戸時代の地誌編纂と地域意識」（『歴史評論』第790号、校倉書房、2016年）を参照。
- 38 小川雪夫「小川泰堂先生小伝」（前掲『日蓮主義研究』第5号）、6頁、小川乃里子「小川泰堂・その人間像」（同）、53頁。
- 39 小川雪夫『日蓮・その生涯と足跡—日蓮聖人の正しい見方—』（錦正社、1961年）、127頁。

- 40 本興寺の公式ホームページ<https://www.honkou-ji.com>を参照。最終閲覧日：2021年12月30日。なお、鎌倉小町の「辻説法跡」として本興寺に言及する書籍が散見される。例えば、市川浩史『日蓮と鎌倉』（吉川弘文館、2014年）、137～138頁。
- 41 川添他監修前掲『日蓮聖人と法華の至宝 図説 第7巻 日蓮聖人註画讃』、118頁。
- 42 三浦前掲「鎌倉における日蓮《布教と迫害》」、64頁。
- 43 石川前掲「小川泰堂一日蓮大士像の唱導者一」、110頁。
- 44 冠前掲「近世後期における「日蓮聖人伝」の出版」、78頁。この点については大澤絢子氏からご教示頂いた。
- 45 中村経年「日蓮上人一代図絵」（『高僧伝集』国民文庫刊行会編・刊行、1913年）、125頁。
- 46 同上、129頁。
- 47 同上、126頁。
- 48 冠前掲「近世後期における「日蓮聖人伝」の出版」、80頁。
- 49 『本化別頭仏祖統紀』（本満寺、1973年）、88頁。
- 50 同上、90頁。
- 51 ただ、日蓮の説法を意味しているわけではないが、『仏祖統紀』および『一代図絵』における「十字街頭逆声盈溢」という表現が目につく（同上、90頁、中村前掲「日蓮上人一代図絵」、130頁）。これは実際の「声」というよりは、日蓮の説法に「驚愕」した極楽寺の良観などの各宗僧侶の反対意見の多さを表現している箇所であると思われる。『真実伝』を執筆する際に泰堂は、「十字街頭逆声盈溢」、すなわち日蓮に反対する各方面の「声」に加え、辻で説法する日蓮自身の「声」を導入し、腰掛石伝承を取り入れた可能性がある。
- 52 冠前掲「近世後期における「日蓮聖人伝」の出版」、79頁。中村経年と『日蓮上人一代図絵』については、望月前掲「幕末期日蓮伝記本に関する一考察」を参照。
- 53 末木文美士『日蓮入門—現世を撃つ思想—』（ちくま学芸文庫、2010年、初出2000年）、60頁。
- 54 星野武男『現代人の日蓮聖人伝』（文松堂出版部、1935年）、165頁。
- 55 「田中智学先生年譜」（田中芳谷監修『田中智学先生影譜』師子王文庫、1960年）、「国柱会百年史年表」（田中香浦監修『国柱会百年史』国柱会、1984年）を参照。
- 56 脇田堯惇「三十年来の記憶」（『雙榎学報』第1号、日蓮宗大檀林同窓会、1903年3月）、134～135頁。本稿では以下の復刻版を参照した。立正大学仏教会編『大崎学報 雙榎学報・1号～5号』（巖南堂書店、1975年）。
- 57 前掲「田中智学先生年譜」、113～114頁、大橋富士子『田中智学先生の碑』（真世界社、1988年）、38～47頁を参照。
- 58 『田中智学自伝—わが経しあと—』第4巻（全10巻、師子王文庫、1977年、以下、『田中智学自伝』）、10頁。ただし、智学の門下、山川智応は、「恩師は夙に「真実伝」を読み、十三四歳の時（明治六七年の交）から両度の鎌倉霊場参拝をせられた、その時この腰掛石が、廃寺となつた妙勝寺の前に、「日蓮上人御腰掛石」の標石が傍らにあつて、側面に施主は江戸某とあり、尊重せられてゐたが、第二度の時はすでに所を移されてゐた」と記しており、鎌倉訪問時期については智学の回想と異同がみられる。山川前掲「吾が結前生後を語る（中）結前の巻（坤）」、27頁。
- 59 『田中智学自伝』、11頁。なお、智学の自伝には次のように記されている。「明治丁丑秋遊于鎌倉始謁聖跡小町路傍存辻説法御腰掛石、転々移去而置一廢寺之門側、辻説法之地今失考據云、予泣然而涙下、頻撫靈石不能去、感慨久之」。冒頭の「明治丁丑」とは1877年のことである。またその時作った漢詩は、「街頭說道唱導師 群衆怨曠末法時／嘗々盛飛三類杖 堂々高揚一乘旗／四條忽服能破惑 七寺頻譏不解慈／一代化門開是處 如何靈跡草離々」というものである。同、13頁。
- 60 同上、26頁。ただし、泰堂の自筆原稿を含む遺品は、長年、小川家所蔵となっていたが、近年、

- 個人管理をしていた末裔によって池上本門寺に奉納されている。「小川泰堂居士顕彰墓域整備完成記念法要営む」（『日蓮宗新聞』2009年2月1日号、日蓮宗新聞社のサイト<http://news-nichiren.jp/2009/02/page/2/?cat=105>）を参照。最終閲覧日：2021年12月30日。
- 61 四箇格言問題については、大谷栄一『近代日本の日蓮主義運動』（法藏館、2001年）、75～81頁を参照。以下、この問題についての記述は本書による。
- 62 「宗門革命祖道復古義会運動彙報」（『師子王』第7号、立正閣、1891年8月8日発行）、28頁。
- 63 この問題については、大谷前掲『近代日本の日蓮主義運動』、63～66頁を参照。なお、小倉の「元寇予言否定説」の前年、1890年には重野安繹による「龍口法難無根説」をめぐる問題が発生している。重野は近代日本史学の創始者であり、史料批判にもとづく考証主義で知られ、「抹殺博士」と呼ばれた人物である。龍口法難という史実を否定した重野に反論するために、智学は日蓮遺文に依拠して、歴史的事実であると考証する公開演説を行った（同、60～63頁）。同演説で智学は「辻説法」という語を用いていないが、次のように言及している。日蓮は「当時諸宗の高僧大徳を相手に、破邪顕正折伏逆化の毒鼓を撃ち、鎌倉市街の辻に立て、行交ふ人に向て先づ此大議論を聞かした」（田中智学『龍口法難論』金鱗堂、1890年、72頁）。
- 64 「今日蓮の帰ら咲」（『國民新聞』1891年8月1日付）、3面。挿絵の作者については、久保田米僊や久保田米斎とする記述が智学の著作では散見されるが、今後の課題としたい。
- 65 雑報「路傍演説、田中智学居士」（『反省会雑誌』第6巻第8号、反省会本部、1891年8月）、29頁。
- 66 この水色一式の衣装はわざわざ宗門革命祖道復古運動の旗揚げにあたって新調されたもので、「特別な衣装だった」と智学の長男は回顧している。田中芳谷「思い出ずるまゝに」（田中香浦編『田中智学先生の思い出』真世界社、1988年）、178頁。
- 67 「田中智学氏の大道演説」（『郵便報知新聞』1891年8月6日付、3面）。
- 68 『田中智学自伝』第2巻、240頁。
- 69 同上、242・253頁。
- 70 桑原智郁「帝都市街道路布教第一信」（『妙宗』第5編第2号、師子王文庫、1902年2月）、26頁。
- 71 桑原智郁「東京道路布教第六信」（『妙宗』第5編第8号、師子王文庫、1902年8月）、10頁。
- 72 桑原智郁「東京道路布教第五信」（『妙宗』第5編第7号、師子王文庫、1902年7月）、23頁。
- 73 望月真澄『江戸の法華信仰』（国書刊行会、2015年）、110頁。清正公信仰の通史的展開については、福西大輔『加藤清正公信仰一人を神に祀る習俗一』（岩田書院、2012年）に詳しい。
- 74 『田中智学自伝』第2巻、237頁。
- 75 雑報「水谷仁海氏」（『令知会雑誌』第46号、令知会、1888年1月）、49～50頁。
- 76 田中智学『宗門之維新』第6版（師子王文庫、1913年、初出1901年）、11頁。ただし、智学は「宗教改革論ヲ叫ビテ世ニ立テルモノ」に北畠道龍や水谷仁海等がいるが、彼らの論は「虚華妄計、義拋ナク実益ナキ幻想」だと、布教実践は評価しつつも、思想内容については否定的である（同）。
- 77 中西直樹『新仏教とは何であったか—近代仏教改革のゆくえ—』（法藏館、2018年）、22頁。
- 78 ただし、岡山孤児院を創設した石井十次は早くから救世軍に共鳴し、すでに1892年10月に尾道市で救世軍方式の屋外演説を行っていた。室田保夫「石井十次と東洋救世軍」（『キリスト教社会問題研究』第46号、同志社大学人文科学研究キリスト教社会問題研究会、1998年）、110頁。また、山室軍平のキリスト教との出会いは、たまたま1887年の秋に聴いたキリスト教の路傍演説であったとされる。室田保夫『山室軍平—無名ノ英雄、無名ノ豪傑タルヲ勉メン哉—』（ミネルヴァ書房、2020年）、20頁。
- 79 「救世軍布教者の拘引」（『読売新聞』1897年1月25日付）、6面。大喪は1897年1月11日に孝明天皇の女御にして明治天皇の嫡母、英照皇太后が崩御したことを受けて設定されたのであ

る。その期間中には、説教者の演説や政治家の選挙運動、音楽の演奏などの実施を糾弾する記事や、神社祭事の余興の中止を報じる記事が目立つ。

- 80 例えば、1902年3月31日、東京の伊勢町喜楽座前の煎餅店の横で桑原が演説した時、ひとりの西洋人は人力車で聴いて一旦立ち去り、ふたたび帰って車夫の手によって1円の紙幣2枚渡そうとしたが、桑原は英語でその理由を聞いたら、あなたに寄付する、救世軍だろう、と言われたという。桑原は仏教徒であることや、演説はお金をもらうためではなく「ブッダの真意」を伝えるためにやっていることを伝え、“Our duty is to give”、“I appreciate your kindness”と言ったら、西洋人はありがとうと言って一礼して立ち去った。桑原智郁「東京道路布教第四信」(『妙宗』第5編第5号、師子王文庫、1902年5月)、25頁。なお、桑原はアメリカで暮らしたことがあり、英語が堪能だった。
- 81 『田中智学自伝』第2巻、245頁。
- 82 この点については、星野靖二「明治前期における仏教者のキリスト教観—『明教新誌』を中心に—」(『國學院大学研究開発推進機構紀要』第11号、國學院大学研究開発推進機構、2019年)、16～17頁を参照。
- 83 『田中智学自伝』第2巻、252頁。なお、1903年に大阪で開催された第5回国勧業博覧会では、その正門前にキリスト教の布教所があり、宣教師の夫人たちが「施本に音楽に勧誘に斡旋」で忙しくしていると報告する記事を『妙宗』で確認できる。つまり、智学らはこうしたキリスト教側の動きに注目していたことが窺える。同記事は浄土宗青年会の「道路演説」や曹洞宗布教会の夏期講習会など、大阪市内各地の公開演説の賑わいを報じている。編集子「浪華だより」(『妙宗』第6編第8号、師子王文庫、1903年7月)、20頁。
- 84 大橋前掲『田中智学先生の碑』、46頁。
- 85 山川智応編「日蓮大士鎌倉辻説法御霊跡復興縁起」(『妙宗』第4編第10号、師子王文庫、1901年10月)、9～34頁。
- 86 同上、21・28頁を参照。
- 87 同上、22頁。
- 88 同上、26頁。
- 89 同上、26頁。
- 90 同上、20頁。
- 91 『田中智学自伝』第4巻、137頁。
- 92 山川前掲「日蓮大士鎌倉辻説法御霊跡復興縁起」、23頁。なお、重要な式典当日の天気は、立正安国会(のちに国柱会)の会員にとって、特別な意味を持つ信仰体験の一部だった。例えば、山川はそれを「天候の奇跡」と呼び、会にとっての重要な儀式の日はほとんどが「日本晴れ」だったと振り返る。山川智応「私はどうして宗教的なる信念をもち得るに至ったか(五)」(『信人』第174号、信人社、1948年2月)、26頁。会員の間では「妙宗日和」、「国柱日和」という言葉が使われるほどだったという。同「私はどうして宗教的なる信念をもち得るに至ったか(六)」(『信人』第175号、信人社、1948年3月)、14頁。
- 93 山川前掲「日蓮大士鎌倉辻説法御霊跡復興縁起」、25頁。
- 94 例えば、妹尾義郎の日記では、「小町の辻説法の御跡に至る。往年の御活動のしのばれて尊さ言はん方なく、合掌すれば題目心底より迸り出づ。我等も亦しかなかるべからず。大聖人の弟子の一人なり、励め」(1920年4月9日)や、「日蓮聖人辻説法の旧跡に参拝した。六百幾十年の往昔がよみがへる」(1923年7月28日)という記述がみえる。妹尾鐵太郎・稲垣真美共編『妹尾義郎日記』第2巻(国書刊行会、1974年)、124・344頁。「自分が鎌倉小町の日蓮上人辻説法の霊跡にお参りする毎に感ずるのは、日蓮上人のあの偉大なる不退転の決心である」という石橋湛山の言葉も挙げられる。石橋湛山「社員会雑話」(石橋湛山全集編集委員会編『石橋湛山全集』第11巻、東洋経済新報社、1972年、初出『東洋経済社内報』1939年



- 9月8日号)、559頁。
- 95 「日蓮上人辻説法旧跡復興会」(『読売新聞』1901年9月10日付、朝刊)、1面。
- 96 「日蓮辻説法旧跡の建碑」(『朝日新聞』1901年9月14日付、東京・朝刊)、4面。
- 97 「楽屋すずめ」(『朝日新聞』1901年10月19日付、東京・朝刊)、4面。
- 98 岩谷泰之「森鷗外と仏教—「日蓮聖人辻説法」を中心に—」(『解釈』第709号、解釈学会、2019年)、14~15頁。
- 99 森鷗外「日蓮聖人辻説法」(『歌舞伎』第47号、歌舞伎発行所、1904年3月)、1~12頁。
- 100 久保米僊述「日蓮聖人辻説法故実」(前掲『歌舞伎』第47号)、15頁。
- 101 三木竹二・眞如女史「日蓮聖人辻説法」合評」(『歌舞伎』第49号、歌舞伎発行所、1904年5月)、35頁。
- 102 大久保榮「鷗外先生に寄す」(前掲『歌舞伎』第49号)、4頁。
- 103 伊原敏郎著、河竹繁俊・吉田暎二編集校訂『歌舞伎年表』第8巻(岩波書店、1963年)、166頁。
- 104 本作の内容は、妙と進士善春の恋愛を中心にしたものであり、あらすじは次の通りである。比企能本の娘・妙は進士善春と恋仲だが、善春は他の宗派を誹謗する日蓮を敵視するため、日蓮を尊崇する能本は二人の関係を許さない。善春は辻説法する日蓮に問答を挑むが、堂々と自分の信念を述べる日蓮に、ついに帰依する。これを見た能本は二人の仲を許す。
- 105 例えば、鷗外寄りの立場を取る雑誌『歌舞伎』第49号の劇評では、「花々しき処、哀れな処、又悲しい分子がない」が「落付いた面白味を感じさせる」(上田敏「辻説法を観て」、12頁)や、「希臘美術風」<sup>クラシックアートふう</sup>「典雅高尚な」「沈静な中幕」(逍遙「日蓮聖人辻説法を観て」、1頁)という肯定的な評価がみえる。一方、新聞紙上では批判的な評価もあり、特に日蓮の描写が妥当でないとする点については、「主人公たる日蓮の人物が如何に写されたるかを研究して殆ど絶望せり」、「結末は恋愛にありて辻説法は寧ろ挿曲たるの作劇法なり」(花房柳外「辻説法」と日蓮の人物」『読売新聞』1904年4月10日付、別刷、2面)という厳しい意見もあった。なお、本作の初演時の興行および受容の状況については、矢内賢二「森鷗外作『日蓮聖人辻説法』をめぐって」(『立正大学文学部論叢』第137号、立正大学文学部、2014年)に詳しい。
- 106 岩谷前掲「森鷗外と仏教」、16頁。
- 107 渡辺聡「傍観者の戯曲と遺書—森鷗外「玉篋両浦嶋」「日蓮聖人辻説法」—」(『駒澤大学大学院国文学会論輯』第22号、駒澤大学大学院国文学会、1994年)、山崎國紀『評伝 森鷗外』(大修館書店、2007年)、矢内前掲「森鷗外作『日蓮聖人辻説法』をめぐって」。ただし、渡辺聡は、本作が日露戦争を意識させるように創作されているが、本作では鷗外が陸軍軍医として従軍しなければならない自分自身の怒りや虚しさを日蓮に投影している、と解釈する。
- 108 森鷗外「日蓮聖人辻説法」(前掲『歌舞伎』第47号)、10頁。
- 109 岩谷前掲「森鷗外と仏教」、17頁。
- 110 同上、20頁。
- 111 なお、岩谷は、鷗外は明治期の仏教を肯定的に捉えていたことと本作品を結びつけ、日露戦争をテーマとした作品であるかのように描くで、仏教に対する自分の肯定の意識を隠しているとする。
- 112 五十殿利治『観衆の成立—美術展・美術雑誌・美術史—』(東京大学出版会、2008年)、56頁。
- 113 例えば、最新のものとしては、日蓮降誕800年を記念して発表された内藤誠作・三代目仙之助画『まんが 日蓮聖人のものがたり』(彩流社、2021年)、30~31頁。
- 114 「小山正太郎君談」(『太陽』第13巻第16号、博文館、1907年12月1日)、130頁。
- 115 田中智学「絵画布教」(『妙宗』第11編第12号、師子王文庫、1908年12月)、132頁。智学が

- 挙げている3点とは、植中直斎「落日」、服部春陽「暁風」、木村武山「阿房劫火」であり、いずれも三等賞を受賞した作品である。
- 116 山川智応講演（石川隆一速記）「日蓮主義とは何ぞや」（『信人』第110号、信人社、1941年5月）、21頁。『信人』の編集者の説明によると、本講演は同題目で1926年に東京新宿園で開催された連続講座の一部である（同、29頁）。
- 117 「近代名画解説（作意 野田九浦）」（『美術グラフ』第25巻第4号、時の美術社、1976年3月）、32頁。
- 118 冠前掲「近世後期における「日蓮聖人伝」の出版」、81・87頁（註11）。
- 119 「日蓮宗、全国初の布教施設 辻説法跡の隣に建設中」（『タウンニュース』2021年7月30日号、<https://www.townnews.co.jp/0602/2021/07/30/585573.html>）を参照。最終閲覧日：2021年12月30日。
- 120 例えば、浜島典彦監修『日蓮を読み解く80章』（ダイヤモンド社、2016年）という一般向けの入門書では、学術書と並んで多くの小説から抜粋が掲載されており、辻説法の描写は大佛次郎『小説 日蓮』（1931年）から引用されている（同、44～45頁）。

## 付記

本稿は、2021年4月28日の大阪大学Global Japanese Studies Research Workshop 4月例会（オンライン開催）で行なった報告をもとにまとめたものです。本稿で用いた立正安国会の貴重な史資料の閲覧に際しては宗教法人国柱会の森山真治理事から、電子新版『日蓮宗事典』（2021年）の閲覧に際しては一般財団法人本多日生記念財団の西條義昌常務理事から多大なご協力を賜りました。また、匿名の査読者に丁寧なコメントを頂きました。記して感謝申し上げます。なお、本稿は2019年度日本学術振興会科学研究費（基盤研究B、課題番号19H01197）の助成による研究成果の一部です。